

放翁鑑賞

河上肇

渭南文集五十卷、老学庵筆記十卷、詩に関する

説話の散見するものを、拾ひ集めて此篇を成す。

放翁詩話

(一)

吳幾先嘗て言ふ、參寥の詩に五月臨^{メバ}平山下路、
藕花無数満^ツ汀洲^ニと云へるも、五月は荷花の盛時
に非ず、無数満汀洲と云ふは当らず、と。廉宣仲云
ふ、此は但^ただ句の美を取る、もし六月臨平山下路と
云はば、則ち佳ならず、と。幾先云ふ、只だ是れ君
が記得熟す、故に五月を以て勝^{まさ}れりと為すも、実は
然らず、止^ただ六月と云ふも亦た豈に佳ならざらんや、
と。(老学庵筆記、卷二)

(二)

梅燻、湛湛トシテ長江去リ、冥冥トシテ細雨来ル、茅茨疎ニシテ
易燻濕、雲霧密ニシテ難燻開、竟日蛟竜喜、盤渦与燻岸回
と。蓋し成都にて賦せる所なり。今の成都は乃ち未
だ嘗て梅雨あらず、惟ただ秋半積陰、氣令蒸溽、吳中
梅雨の時と相類するのみ。豈に古今地氣同じからざ
るあるか。(老学庵筆記、卷六)

(三)

欧陽公の早朝の詩に云ふ、玉勒争門随仗入、牙牌
当殿報班齐と。李徳芻言ふ、昔より朝儀未だ嘗て牙
牌報班齐と云ふ事あらずと。予之を考ふるに、実に
徳芻の説の如し。朝儀に熟する者に問ふも、亦た惘
然、以て有るなしと為す。然かも欧陽公必ず誤まら
ざらん、当まに更まに博ひろく旧制を攷かんふべき也。(老学庵筆
記、卷七)

(四)

張文昌の成都曲に云ふ、錦江近西煙水緑、新雨山頭
荔枝熟、万里橋边多燻酒家、遊人愛燻向燻誰家宿燻と。

此れ未だ嘗て成都に至らざる者なり。成都には山なし、亦た荔枝なし。蘇黃門の詩に云ふ、蜀中荔枝出爆嘉州爆、其余及爆眉半有と。蓋し眉の彭山県（註、成都の南方）、已に荔枝なし、況や成都をや。（老学庵筆記、卷五）

以上の四項は、いづれも放翁が如何に実事の追究に徹底であつたかを示さんがために、写し出したのである。

その雑書と題する詩（劍南詩稿卷五十二）に云ふ、枳籬莎径入爆荆扉爆、中有爆村翁爆百結衣、誰識新年歡喜事、一雞一犬伴爆東歸と。そして自註には雞犬皆実事としてある。

また貧舍写興と題する詩（詩稿卷六十八）に云ふ、粲粲新霜縞爆瓦溝爆、離離寒菜入爆盤羞爆、贅童擁爆掃爆枯葉爆、曠婢挑爆灯縫爆破裘爆と。そしてこゝにも亦た自ら註して贅

曠皆紀実としてある。彼は自分で詩を作る場合にも、決して好い加減のでたらめを書いては居ないのである。

私は之についてゴルキーを思ひ出さずには居られない。今私の手許にある彼の『文学論』は、十分信頼の出来る訳書だとは思へないが、その中から、彼の見解の一端を見るに足る或る一つの個所を、ここに写し出して見よう。

次の一節は、マルチャノフといふ新人の長編小説『農

民』について言つてゐる言葉である。

「多くの批評家はマルチャノフをひどく称讃してゐるが、私は次のことを言はざるを得ない。即ち彼は才能ある人ではあるが、文学者としては恐ろしく無学であると。その証拠には、二一〇頁に、「ヴラディミル・イリイチの命によつて、マドヴェイは前世紀の九十八年にペテルブルグからウラル地方へ移り、そこで老ボルシェヴィク親衛兵の戦闘部隊を組織した」などと書いてあるが、しかし九十八年にはヴェ・イリイチは追放されてゐたので、ペテルブルグには居なかつたのである。またこの作者は、どんな戦闘部隊について語つてゐるのだらうか？ 元來このやうな戦闘部隊が出来たのは、ずっと後年のことである。作者はまた或る場所で、めす鷲の震へ声のことを書いてゐるが、鳥の雌が鳴かない位のこととは、農村の子供なら誰だつて知つてゐる。作者はまた、ある富農の家でキリスト変容祭を祝ふために準備された御馳走のことを、「酸クリームでこつてり味をつけ、そしてバタを初氷のやうに薄くぬつた大麦製のでかい饅頭、アンナの胸のやうに豊麗な小麦製の白いシャニガ（訳注、凝乳菓子の一種）、食卓一杯に並んだ大きな魚入饅頭、それから数へ切れないほどのフヴォーロスト（訳注、油で揚げた焼菓

子)や凝乳菓子など。またペーチカの床の上には、脂ぎつた肉のシチュー皿、鱈の耳のスープ皿、ハム、犢肉、松鶏の肉、粥、バタ、ソース等々が、ずらりと並んでゐた。云々」と書いてゐるが、作者が書き並べた数だけの皿を農家のペーチカの床の上に置くことは、物理学的に不可能なのである」。

序ながら放翁の文中に見えてゐる荔枝レイシのことを説明しておく。この木は、高さ三丈許、葉の状は箭鏃の如くにして平滑、その果は竜眼リュウガン(新村出氏の『辞苑』にその図出づ)の実に似て、熟すれば真赤になり、肉は白くして甘き汁に富む。蘇東坡の潮州韓文公廟碑の終に於餐ユウ荔枝(ト)と云ふのが即ち荔枝の果で蕉黄燻としてあるが、この荔丹と云ふのが即ち荔枝の果である。恐らく之は極めて珍らしいものなのであらう。放翁は次のやうな事も書き残してゐる。「予、成都議に参し、事を漢嘉に撰し、一たび荔子の熟するを見る。時に凌雲山、安樂園、皆な盛処。糾曹何預元立、法曹蔡奮肩吾、皆な佳士。相与ともに同じく樂む。薛許昌、亦た嘗て成都幕府を以て来り郡を撰す。未だ久しからずして罷やめ去る。故に其の荔枝の詩に曰ふ、歳杪監州曾見樹、時新入座但聞名と。蓋し時に及ばざりしを恨める也。毎つねに二君と之を誦す」。更に次のやうな他人の事まで書き誌してあ

る。「余深、相を罷^やめて福州の第中に居る。荔枝あり初めて実^{みの}る。絶大にして美、名づけて亮功紅と曰ふ。亮功は深家御書閣の名なり。靖康中、深、建昌軍に謫せられ、既に行く。荔枝復た実らず。明年深歸りしに、荔枝復た故^{もと}の如し。云々」。荔枝と云ふものの極めて珍らしきものなることを想像するに足る。

序に今一つ書き添へておかう。東坡が惠州に謫されてゐた頃の詩に和陶歸園田居六首と題するものがあり、その引の中には「荔子纍纍、瓠実の如し。父老あり、年八十五、指して以て余に告げて曰く、是の食ふ可きに及んで、公、能く酒を携^{たづさ}へて来り遊ばんかと」としてあるが、更に薏苡と題する詩の中には、「草木各 宜^{よろ}きあり、珍産南荒に駢^{なら}ぶ。絳囊荔枝を懸^かけ、雪粉桄榔を剖^さく」といふ句がある。絳^{カウ}はこきあかき色。荔支が真赤に熟したのを、絳^{あか}き囊を懸けたやうだと形容したのであらう。ここにも南荒の珍産としてあるから、暖い南支那以外には滅多に見られないものなのであらう。さて余談のまた余談になるが、続国訳漢文大成に収められてゐる蘇東坡詩集を見ると、先きに引いた句が次のやうに講釈されてゐる。「草木とても各 宜しきところがあつて、南荒の地に於ては、殊に珍産が並列して居る。荔支は、赤い囊を雜へて懸くべ

く、桃榔を断ち破れば、中には雪の如き粉があつて、とりどりに珍らしい云々」。ところで、赤い囊を雑へて懸けるとは、どんなことをするのであらう。不思議に思つて字解のところを見ると、蔡君謨の荔支の詩に、厚葉織枝雜絳囊とあるとしてある。なるほど厚葉織枝の間に雑ざつて荔丹が赤い囊のやうに懸かつてゐると云ふのなら解かるが、ただ赤い囊を雑へて懸けるでは、どうにもならない。一体誰がこんな事を書いてゐるのかと巻首を見たら、文学博士久保天随訳解としてあつた。

(五)

張継の楓橋夜泊の詩に云ふ、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘声到爆客船煙と。歐陽公之を嘲りて云ふ、句は則ち佳なるも、夜半は是れ打鐘の時にあらざるを如何せんと。後人また謂ふ、惟ただ蘇州にのみ半夜の鐘ありしなりと。皆な非なり。按ずるに于置褒中即事詩に云ふ、遠鐘来爆半夜煙、明月入爆千家煙と。皇甫冉、秋夜会稽の嚴維の宅に宿すの詩に云ふ、秋深臨燭水月、夜半隔燭山鐘と。此れ豈に亦た蘇州の詩ならんや。恐らく唐時の僧寺には自ら夜半の鐘ありしなり。京都

街鼓今尚ほ廃す。後生唐の詩文を読んで街鼓に及ぶ者、往々にして茫然知る能はず。況んや僧寺夜半の鐘をや。（老学庵筆記、卷十一）

唐詩選岩波文庫版の註には、この夜半の鐘声について次の如き註が加へてある。「夜半に鐘声あるか無きかに就いて古来論あり。胡応麟曰く、夜半の鐘声客船に到る、談者紛紛、皆昔人のために愚弄せらる。詩は流景を借りて言を立つ、惟だ声律の調、興象の合ふに在り、区々の事實彼れ豈に計るに暇あらんや。夜半の是非を論ずるなかれ、即ち鐘声を聞くや否やも未だ知るべからざるなりと」。かくの如く、胡応麟は、詩に於ては区々の事實は豈に計るに暇あらんや、として居るが、放翁の態度が之と徹底的に対蹠的であることは、以上各項の示すが如くである。

放翁自身にも宿楓橋と題する七絶があるが、それには七年不到楓橋寺、客枕依然半夜鐘としてある。これはもちろん実際に半夜の鐘声を聴いたのではない、張継の作によつて其の遺響が今尚ほ詩の世界に伝はつてゐるのを、物理的な鐘声よりもより鮮かに聴いたのである。これは夜半鐘声到客船といふ張継の詩が遺つてゐたが故に、始

めて生じる詩境である。かくて私はここでも復た、ゴルキーの「真の芸術は拡大誇張の法則を有する、それは単なる空想の所産ではなくて、客観的な諸事実の全く合法的な且つ必然的な詩的誇張である」とか、「偉大な芸術にあつては、ロマンチズムとリアリズムとが何時でもまるで融合されて居るかのやうである」とかいふ言葉を思ひ出す。

平野秀吉氏の唐詩選全釈には、「後、張継、再び此に來り、重泊楓橋と題して、白髮重来一夢中、青山不改旧時容、烏啼月落江村寺、欹枕猶聽夜半鐘と詠じたが、詩品も劣り、且つ全唐詩にも載せざるを見れば、或は後人の偽作か」としてある（簡野道明氏著『唐詩選詳説』にも之と同じことが書いてある）。しかるに明の朱承爵の存余堂詩話を見ると、「張継の楓橋夜泊の詩は、世多く伝誦す。近ごろ孫仲益の楓橋寺を過ぎる詩を読むに、云ふ、白首重来一夢中、青山不改旧時容、烏啼月落橋邊寺、欹枕猶聞夜半鐘と。亦た前人の意を鼓動すと謂ふ可し矣」としてある。これで見ると、平野氏の言ふ所とは作者が違ひ、詩も江村寺が橋邊寺となつてゐる。

(跋東坡詩草) 東坡の此詩に云ふ、清吟雜爆夢寐燵、
得燵句旋已マタニ忘ルと。固より已に奇なり。晩に惠州に謫
せられ、復た一聯を出して云ふ。春江有爆佳句燵、我
醉墮爆渺莽燵と。即ち又た少作(わかき頃の作)に一
等を加ふ。近世の詩人にして、老いて益 蔽なる、蓋
し東坡の如きは未だ有らざる也。学者或は易心を以
て之を読むは何ぞや。(渭南文集、卷二十七)

これは多分東坡の自筆に成る詩稿に加へられた跋文であらう。東坡の此詩に云ふとあるより考ふれば、詩は恐らく只だ一首だつたのであらう。ところで清吟雜夢寐、得句旋已忘といふ句のある東坡の此詩の全容はどんなものであるのか、私の坐右にある蘇東坡詩集の中には、いくら探しても出て来ない。それは宋人朱繼芳の塵飛燵不燵到燵処、山色入芒目燵、乘燵興一長吟、回燵頭已忘燵句を思ひ起さしめるが、恐らく朱繼芳の方が年代は後であらう。春江有佳句、我醉墮渺莽の方は、幸にして詩の全体を求めることが出来た。それは和燵陶歸園田居六首燵の一つで、かういふのである。

心空飽新得、

境熟夢餘想

江鷗漸ク馴集、

蛩叟已ニ還往

南池綠錢生、

北嶺紫筍長

提グモ壺ヲ豈解センヤ飲ヲ、

好語時見燻廣

春江有爆佳句燻、

我醉墮爆渺莽燻

さて此の最後の一聯について久保天随氏の講釈を見る
と、それにはかう書いてある。「春江に臨めば、自然、佳
句も出来るが、やがて我は酔うて、草木渺莽たる中に倒
れて寐てしまった」。これでは東坡先生も苦笑されざるを
得ないだらう。詩にいふ渺莽は、ベウバウ広くしてはてしなき貌。
そしてその渺莽に墮つるものは、東坡先生ではなく、春
江の佳句である。かくして、句を得てまた已に忘ると云
ふやうな、おもしろくはあつてもまだ露骨なるを免れな
かつたものが、春の霞の如く詩化され、そこに一段の進
境を示す。放翁の老いて益 蔽といふ評言は、それを指
すのであらう。

前に引いた朱承爵の存余堂詩話を見ると、「東坡、少年
詩あり云ふ、清吟雜夢寐、得句旋已忘と。固もとより已に奇
なり。晩に惠州に謫せられ、復た一聯ありて云ふ、春江
有佳句、我醉墮渺莽と。即ち又た少作に一等を加ふ。書
家を評して筆年老に随ふと謂ふ、豈に詩も亦た然らざら

んや」としてある。詩話など書くほどの人が先人の説を剽窃して平気で居るのであらうか。

(七)

東坡の牡丹の詩に云ふ、一朵妖紅翠欲爛流と。初め翠欲流の何の語なるやを曉らず。成都に遊ぶに及び、木行街を過ぎよりしに、市肆に大署して曰ふあり、郭家鮮翠紅紙鋪と。土人に問うて、乃ち蜀語の鮮翠は猶ほ鮮明と言ふがごとくなるを知る。東坡蓋し郷語を用ひて云へるなり。(老学庵筆記、卷八)

東坡の詩は和爆述古冬日牡丹爛四首と題せるものの一にして、それは次の如くである。

一朵ノ妖紅翠欲ス流レント、春光回照雪霜羞

化工只欲爛呈爆新巧爛、不爛放爆間花爛得爛少休爛

続国訳漢文大成を見るに、ここは岩垂憲徳氏の訳解になつて居り、そして私がここに引いた老学庵筆記が引用されてゐる。私はこれによつて此の筆記が必ずしも世に顧みられないものでない事を知るを得た。なほ岩垂氏は字解といふ所で、宋の高似孫の緯略なるものを引用して

ある。それには、かつ云つてある。「翠は鮮明の貌、色に非らざる也。然らずんば、東坡の詩、既に紅と曰へり、又た翠と曰ふ可ならんや」。

(八)

東坡、嶺海の間に在りて、最も陶淵明柳子厚の二集を喜び、之を南遷の二友と謂ふ。予、宋白尚書の玉津雜詩を読むに、云ふあり、坐臥將何物、陶詩与柳文と。則ち前人、蓋し公と暗合する者あるなり。(老学庵筆記、卷九)

(九)

東坡の絶句に云ふ、梨花澹白柳深青、柳絮飛時花滿城、惆悵東闌一株雪、人生看得幾清明と。紹興中、予福州に在り、何晋之の大著を見しに、自ら言ふ、嘗て張文潜に従うて遊ぶ、文潜の此詩を哦するを見る毎に、以て及ぶ可らずと為せしと。余按ずるに、杜牧之、句あり云ふ、砌下梨花一堆雪、明年誰此憑欄干と。東坡固より牧之の詩を窃む者に非ず、然か

も竟つひに是れ前人已に之を道いへるの句、何んすれぞ文
潜之を愛するの深きや、豈に別に謂おもふ所あるか。聊いさそ
か之を記し以て識者を俟まつ。(老学庵筆記、卷十)

東坡の詩は、和孔密州五絶の一で、東欄梨花と題する
もの。杜牧之は世にいふ小杜、杜牧のこと。彼は晩唐の
人である。

(十)

柳子厚の詩に云ふ、海上尖山似爆劍鋌燵、秋来処処
割爆愁腸燵と。東坡之を用ひて云ふ、割愁還マタ有爆劍鋌山燵
と。或は謂ふ、割愁腸と言ふべし、但ただ割愁と言ふ
可からずと。亡兄仲高云ふ、晋の張望の詩に曰ふ、愁
来不可割と、此れ割愁二字の出处なりと。(老学庵筆
記、卷二)

東坡の詩は白鶴峰新居欲爆成夜過爆西隣翟秀才燵二首と題
せるものの一。問題の句は、繫爆悶燵豈無爆羅帶水燵、割愁還
有爆劍鋌山燵といふ一聯を成せるもの。前の句は韓退之、
後の句は柳子厚によることは、その自註に記してある。

但し続国訳漢文大成では、自註に引く所の柳子厚の句が海上尖峰若劍鋸(ニ)となつてゐる。放翁は記憶に従つて筆を執り、誤つて峰を山となし若を似となしたのであらうか。蔵書に乏しい私は、今これを審にし得ない。

(十一)

夜涼疑有雨、院静似無僧。これ潘道遥の詩なり。

(老学庵筆記、卷五)

東坡の詩

佛燈漸暗饑鼠出、山雨忽來脩竹鳴

知ル是レ何人ノ舊詩句、

已應爛知爆我此時情煙

といふ七絶の題には、「少年の時、嘗て一村院を過よぎり、壁上に詩あるを見る。云ふ、夜涼疑爛有爛雨、院静似爛無爛僧と。何人の詩なるやを知らざる也。黄州禅智寺に宿せしに、寺僧皆な在らず、夜半雨作おこり、尚ほ此の詩を記おぼゆ。故に一絶を作る」としてある。知は何人旧詩句の知るは、知らずの意であること、言ふまでもない。東坡の詩によつて伝へられた此の句は、私のやうなものでも記憶してゐるから、長生して書物ばかり読んでゐた放翁が、ふとこ

んな事を見付けて居るのは、何も不思議はない。潘道遥は名を疊ラウと云ふ。宋の太宗に召されて進士第を賜ひ、事に坐して中条山に遁れ、後収繫されしも、真宗その罪を釈し、盪州参軍となす。詩集及び詞集あり。日本では中野道遥、坪内道遥などいふ文学者が居た。これらの人はこの潘道遥を知つて居たのであらうか。

(十二)

(跋淵明集) 吾年十三四の時、先少傅に侍し城南の小隠に居る。偶たまたま藤床上、淵明の詩あるを見、因て取りて之を読む。欣然会心、日且まさに暮れんとし、家人食に呼ぶも、詩を読む方にまよ楽しく、夜に至つて卒つひに食に就かず。今之を思ふに、数日前の事の如く也。慶元二年、歳在乙卯、九月二十九日。山陰陸某務観、書於三山龜堂、時年七十有一。(渭南文集、卷二十八)

放翁六十九歳の作に読陶詩と題するものあり、その冒頭に、「我が詩淵明を慕ふ、恨むらくは其の微いたに造らざることを」とあり、また八十三歳の作に自勉と題するものあり、その冒頭には、「詩を学べばまよ当に陶を学ぶべく、書

を学べば当に顔を学ぶべし」としてある。以て如何に彼が陶淵明に傾倒せしかを知るに足る。

(十三)

茶山先生云ふ。徐師川、荊公の細ニ数^へ爆落花^ヲ因^{リテ}

坐^{スルコト}久ク、緩ニ尋^テ爆芳草^ヲ得^{ルコト}爛^帰遅^シに擬して云

ふ、細ニ落^ツ李花那^ソ可^ン数^フ、偶行^{キテ}爆芳草^ヲ歩^{スルコト}

因^テ遅^シと。初め其意を解せず、久くして乃ち之を得。

蓋し師川は専ら陶淵明を師とせる者なり。淵明の詩、

皆な適然寓意、物に留まらず。悠然見南山の如し。東

坡の其の決して南山を望むに非ざるを知る所以^{ゆゑん}なり。

今、細数落花、緩尋芳草と云へば、留意甚し、故に

之を易^かふと。又云ふ。荊公多く淵明の語を用ひ而か

も意異なる。柴門雖設要常関、雲尚無心能出岫の如

き、要字能字皆な淵明の本意に非ざる也と。(老学庵

筆記、卷四)

19 公とは王安石のこと。詩は北山と題する七絶で、全文を写

し出せば次の如くである。北山輸シテ緑ヲ漲ル横二陂一、直
塹回塘灩灩時、細ニ数ハ爆落花ヲ因リテ坐スルコト久ク、緩ニ尋テ芳
草ヲ得ルコト燭ト帰ラ遲シ。

なほ文中に東坡の云々と言つてあるのは、東坡の次の説
を指したものである。「采リ爆菊ヲ東籬ノ下ニ、悠然トシテ見ル
南山ヲ。これは菊を采る次いでに偶然山を見るのである。
初めより意を用ひずして、境と意と会ふ、故に喜ぶべき
也。もし望南山となせば便ち興味索然たるを覚ゆ」。

(十四)

(跋王右丞集) 余年十七八の時、摩詰の詩を読む
最も熟す。後、遂に之を置くもの幾ほとんど六十年。今
年七十七、永昼無事、再び取つて之を読む。旧師友
を見るが如し、間闊の久きを恨む。(渭南文集、卷二
十九)

王右丞、摩詰、共に王維のこと。この跋文は王維に対
する放翁の関係を知るに足るもの。

(跋花間集) 花間集は皆な唐末五代の時人の作。
斯この時に方あたつて、天下岌岌、生民死を救うて暇いとまあらず、士大夫乃ち流宕かく此の如し。歎なげずべけんや。或は無聊の故に出づるか。(渭南文集、卷三十)

(十六)

(跋詩稿) これ予が丙戌以前の詩、二十の一なり。巖州に在るに及んで、再編、又た十の九を去る。然かも此の残稿終つひに亦た之を惜み、乃ち以て子聿に付す。紹熙改元立夏日書。(渭南文集、卷二十七)

丙戌は乾道二年、放翁四十二歳の時に当る。巖州にて再編すと云ふは、淳熙十四丁未年、放翁六十三歳の時に属す。この年始めて詩を刻せり。紹熙元年庚戌は六十六歳の時に当り。以後家居、この年また詩稿を刪訂せるなり。

趙翼の甌北詩話には、次の如く書いてある。「古来詩を作るの多き放翁に過ぎたるはなし。今その子、子「虚ノ八」、よみは「きよ」、498-15」が編する所の八十五巻に

就いて之を計るに、已に九千二百二十首。然かも放翁六十三歳、嚴州に在りて詩を刻し、已に旧稿を將つて痛く刪汰を加ふ。六十六歳、家居して又た詩稿を刪訂す。自跋に云ふ、これ予が丙戌以前の詩、十の一なり、嚴州に在りて再編、又た十の九を去ると。然らば則ち丙戌以前の詩にして存する者は才に百の一のみ」。即ち私の見てゐる渭南文集には、丙戌以前詩二十之一としてあるのが、趙翼の引く所では十之一となつてゐる。私は今どちらが正しいかを確め得ない。

(十七)

岑參の西安幕府に在るの詩に云ふ、那ナ知ラン故園ノ月、也到ル鉄関ノ西と。韋応物作郡の時亦た詩あり云ふ、寧ナ知ラン故園ノ月、今夕在リ西楼ニと。語意悉く同じ、而かも豪邁間澹の趣、居然自ら異なる。(老学庵筆記、卷三)

(十八)

劉長卿の詩に曰く、千峰共ニス夕陽ヲと。佳句なり。

近時僧癩可これを用ひて云ふ、乱山争フ落日ヲと。工たくみ
なりと雖も窘せまる。本句に會あひはず。(老学庵筆記、卷四)

放翁六十歳の時の詩に、「独り立つ柴荆の外、頽然たる
一秃翁、乱山落日を呑み、野水寒空を倒さかさまにす」といふ句
がある。

(十九)

呂居仁の詩に云ふ、蠟燭堆盤酒過花と。世以て新
となす。司馬温公、五字あり、云ふ、煙曲香尋篆、盃
深酒過花と。居仁蓋けだし之を取れる也。(老学庵筆記、
卷四)

(二十)

唐の韓穆の詩に云ふ、門外碧潭春洗燭馬、樓前紅燭
夜迎燭人と。近世、晏叔原の樂府詞に云ふ、門外綠楊
春繫燭馬、床前紅燭夜呼燭盧と。気格乃ち本句に過ぐ、
之を剽と謂はざるも可なり。(老学庵筆記、卷五)

人なり。その詞の全文は次の如し。家近旗亭酒易酤、花
 時長得醉工夫、伴人歌扇懶妝梳。戶外綠楊春繫馬、牀頭
 紅燭夜呼盧、相逢還解有情無。（放翁の引くところでは、
 戶外が門外、牀頭が牀前となつてゐる。）

薛礪若の『宋詞通論』には、晏叔原の詞について、次
 の如く述べてある。「彼の詞、最も善く詩句を融化す。後
 期の周美成と正に復た遙々相映らす。例へば彼の浣溪沙
 「戶外綠楊春繫馬、牀頭紅燭夜呼盧」の二句の如きは、完
 全に唐の韓穆の詩句を用ひ、わづか僅に原詩「牀前」の「前」字
 を將つて一個「頭」字に易へ、而かも用ひ来つて直ちに
 天衣無縫の如し、云々」。

(二十一)

白樂天云ふ、微月初三夜、新蟬第一声と。晏元憲
 云ふ、緑樹新蟬第一声と。王荊公云ふ、去年今日青
 松路、憶似聞蟬第一声と。三たび用ひて愈いよいよたくみ工。詩
 の窮り無きを信ず。（老学庵筆記、卷十）

王荊公とは既に述べた如く王安石のこと。

(二十一)

唐の王建の牡丹の詩に云ふ、可シ憐ズ零落中蕊ムノ、收取ナ作メリシテ燭燭
香ト焼クと。工なりと雖も格卑し。東坡その意を用ひ
て云ふ、未ダ爛爛忍ビ爛爛汚スニ泥沙ニ煙煙、牛酥煎ル落ラ蕊ヲと。
超然同じからず。(老学庵筆記、卷十)

(二十二)

水流天地ノ外、山色有無ノ中。王維の詩なり。権徳輿
の晩渡揚子江の詩に云ふ、遠岫有無ノ中、片帆烟水上上
と。已に是れ維語を用ふ。欧陽公の長短句に云ふ、平
山闌檻倚ル晴空ニ煙煙、山色有無ノ中と。詩人是こゝに至つて
蓋けだし三たび用ふ。東坡先生乃ち云ふ、記取醉翁語、山
色有無中と。則ち欧陽公この句を創為すと謂ふに似
たるは何ぞや。(老学庵筆記、卷六)

(二十四)

欧陽公、夷陵に謫せられし時、詩に云ふ、江上孤
峰蔽爆緑蘿爆、梟楼終日対爆嵯峨爆と。蓋し夷陵の梟治、

下は峡江に臨む、緑蘿溪と名づく。此より上に^{さかのぼ}浜れば、即ち上牢下牢関、皆な山水清絶の処なり。孤峰は即ち甘泉寺山、孝女泉及び祠ありて万竹の間に在り、亦た幽邃喜ぶ可し。峡人歳時遊観頗る盛。予、蜀に入る、往来皆な之を^よ過ぎる。韓子蒼舍人、泰興県道中の詩に云ふ、^爆泉郭連^爆青竹、^爆人家蔽^爆緑蘿と。欧公の句に^{ちな}因めるに似て而かも之を失す。此の詩蓋し子蒼の少作、故に云ふところを^{つまひ}審かにせず。(老学庵筆記、卷七)

(二十五)

荆公の詩に云ふ、^爆閉戸欲^{ルモ}推^爆愁、^爆愁終^ニ不^爆肯^テ去^爆と。劉賓客の詩に云ふ、^爆与老無^{キモ}期^爆約、^爆到来何^ソ等閑^{ナル}と。韓舍人子蒼、取りて一聯と作して^な云ふ、^爆推愁不^爆去^{また}還^{また}相^爆覓、^爆与老無^爆期^爆稍^爆見^ル侵^サと。古句に比して蓋し益^{たくみ}工なり。(老学庵筆記、卷八)

(二十六)

杜詩の夜闌更秉燭、意は夜の已に深きを謂ふなり。

睡るべくして而かも復た燭を乗る、以て久客歸るを
喜ぶの意を見る。僧徳洪妄云ふ、更は当に平声まひに読
むべしと。なんぞ是あらんや。(老学庵筆記、卷六)

杜甫の詩は羌村(村の名、当時杜甫の妻子の寓せし地)
と題するもので、その全文は次の如し。

崢嶸タリ 赤雲ノ西、 日脚下ル 平地ニ

柴門鳥雀噪ギ、 歸客千里ヨリ至ル

妻孥怪ミ 我ノ在ル、 驚定還キマツテ 拭フ 淚ヲ

世亂レテ 遭ヒ 飄蕩ニ、 生還偶然ニ 遂グ

鄰人滿チ 墻頭ニ、 感歎シテ 亦タ 歔歔ス

夜闌ニシテ 更ニ 秉リ 燭ヲ、 相對シテ 如シ 夢寐ノ

徳洪妄は更字をさらにの意に読まずに、一も二もの意
に読まざうとしたものと思はれる。

(二十七)

老杜の哀江頭ニ云ふ、黄昏胡騎塵滿城、欲往爆

城南爆 忘爆 城北爆と。言ふところは方に皇惑、死を避く

の際、城南に往かんと欲して、乃ち孰いづれが南北なるや
を記する能はざる也。然るに荊公集句兩篇、皆な欲

往城南望城北と作す。或は以て舛誤となし、或は以て改定となす、皆な非なり。蓋し伝ふる所の本、偶同じからず、而かも意は則ち一なり。北人は向を謂ひて望となす。城南に往かんと欲して乃ち城北に向ふと謂ふは、亦た皇惑、死を避け、南北を記する能はざるの意なり。(老学庵筆記、卷七)

問題とされてゐる句は、少陵の野老声を呑んで哭す、春日潜かに行く曲江の曲といふ句で始まる七言古詩の結句である。岩波文庫版には欲往城南忘南北とし、脚註に「一本に南北を城北に作れるあり」としてあるが、私は城北を南北としては全く駄目だと思ふ。

荊公集句とは王荊公唐百家詩選のことか。

(二十八)

今人杜詩を解する、但だ出処を尋ね、少陵の意初めより是の如くならざるを知らず。且つ岳陽樓の詩の如き、昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南碎、乾坤日夜浮、親朋無一字、老病有孤舟、戎馬関山北、憑軒涕泗流、此れ豈に出処を以て求む可け

んや。縦たとひ字字出処を尋ね得しむるも、少陵の意を去る益 遠し。蓋けだし後人元もと杜詩の古今に妙絶なる所以ゆゑんのもの何処に在るやを知らず、但ただ一字も亦た出処あるを以て工たくみと為すも、西崑酬倡集中の詩の如き、何ぞ曾かつて一字の出処なき者あらん、便すなはち以て少陵に追配せんとする、可ならんや。且つ今人の作詩、亦た未だ嘗て出処なきはあらざるも、渠かれ自ら知らざるのみ、若し之が箋注を為さば、亦た字字出処あらん、但だ其の悪詩なるを妨げざるのみ。(老学庵筆記、卷七)

(二十九)

老杜の薛三郎中に寄す詩に云ふ、上熈馬不用熈扶、每熈扶必怒瞋スと。東坡の喬仝を送る詩に云ふ、上熈山如熈飛瞋爆人ノ扶熈と。皆な老人を言ふ也。蓋し老人は老を諱いむが故のみ。若し少壮なる者ならば、扶たすけらるるも扶けられざるも与に可、何の瞋いかることか有らん。(老学庵筆記、卷八)

(三十)

歐陽公、梅宛陵、王文恭の集、皆な小桃の詩あり。

欧詩に云ふ、雪裏花開イテ人未燭知、摘ミ来リ相顧ミテ共ニ驚疑、便須ベシ索メテ酒ラ花前ニ醉フ、初テ見ル今年ノ第一枝と。初め但た桃花に一種早く開ける者あるのみと謂おもへり。成都に遊ぶに及んで、始めて所謂小桃なる者は、上元前後即ち花を著け、状は垂糸の海棠の如くなるを識る。曾子固の雜識に云ふ、正月二十開、天章閣賞小桃と。正に此を謂ふなり。(老学庵筆記、卷

四)
(三)

上元は旧曆正月十五日。即ち小桃と云ふのは、百花に先だちて正月勿々に咲く海棠に似た花なのである。東坡の陳述古に答ふと題する詩に

小桃破萼未燭勝春、

羅綺叢中第一ノ人

聞道使君歸リ去ルノ後、

舞衫歌扇總テ成燭塵

といふのがあるが、放翁の説明によつて起承二句の意味がよく分かる。ところで続国訳漢文大成の蘇東坡詩集を見ると、岩垂憲徳氏は、之に対して次のやうな講釈を加へて居られる。「春風が柳を吹いて、緑は糸の如く、晴れた日は、紅を蒸して小桃を出すと云ふが、小桃が紅萼を

発いたので、却て春に勝^たへられない風情がある。そして綾錦羅綺の中に、解語の第一人がある」。凡そ此の種の講釈本をたよりに、漢詩を味ふことの如何に難きかは、之によつて愈々悟るべきである。

放翁自身の詩にも次のやうなのがある。序に書き添へて此の稿を了ることにしよう。

西村一抹ノ煙、 柳弱^ク小桃妍

要^燗識^爆春風ノ處^煙、 先生拄杖ノ前

八月に入りてより屢々高熱を發し、九月に入るも未だ癒えず。病間この稿を成す。

昭和十六年九月九日 閉戸閑人

後註

(一)三

(二)「峰若」に白丸傍点

(三)原文は括弧「」を使うが、他の所と一致させるため改める

底本：「河上肇全集 20」岩波書店

1982（昭和57）年2月24日発行

底本の親本：「陸放翁鑑賞 下巻」三一書房

1949（昭和24）年11月発行

入力：はまなかひとし

校正：今井忠夫

2004年5月18日作成

2005年11月2日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。